

## 2. 正定値カーネルと再生核ヒルベルト空間

正定値カーネルによるデータ解析  
— カーネル法の基礎と展開 —

福水健次

統計数理研究所／総合研究大学院大学

統計数理研究所 公開講座

2011年1月13,14日



# 概要

- 正定値カーネル  
定義と例
- 再生核ヒルベルト空間と正定値カーネル  
再生核ヒルベルト空間の定義  
正定値カーネルとの関係 (Moore-Aronszajn theorem)  
特徴写像
- 正定値カーネルとRKHSの基本的性質  
正定値カーネルの性質  
再生核ヒルベルト空間の性質  
Bochnerの定理

# 概要

- 正定値カーネル  
定義と例
- 再生核ヒルベルト空間と正定値カーネル  
再生核ヒルベルト空間の定義  
正定値カーネルとの関係 (Moore-Aronszajn theorem)  
特徴写像
- 正定値カーネルとRKHSの基本的性質  
正定値カーネルの性質  
再生核ヒルベルト空間の性質  
Bochnerの定理

# 正定値カーネル

- (実)正定値カーネル

$\Omega$ : 集合.  $k : \Omega \times \Omega \rightarrow \mathbf{R}$

$k(x,y)$  が  $\Omega$  上の (実)正定値カーネル であるとは, 次の2つを満たすことをいう

1. (対称性)  $k(x,y) = k(y,x)$

2. (正定値性) 任意の自然数  $n$  と  $\Omega$  の点  $x_1, \dots, x_n$  に対し,

$$\left( k(x_i, x_j) \right)_{i,j=1}^n = \begin{pmatrix} k(x_1, x_1) & \cdots & k(x_1, x_n) \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ k(x_n, x_1) & \cdots & k(x_n, x_n) \end{pmatrix} \quad (\text{Gram行列})$$

が (半)正定値. すなわち, 任意の実数  $c_1, \dots, c_n$  に対し,

$$\sum_{i,j=1}^n c_i c_j k(x_i, x_j) \geq 0$$

- 複素数値の正定値カーネル

$$k : \Omega \times \Omega \rightarrow \mathbb{C}$$

の場合にも正定値性は以下のように定義される.

任意の自然数  $n$  と, 任意の  $\Omega$  の点  $x_1, \dots, x_n$  と, 任意の複素数

$$c_1, \dots, c_n \text{ に対し, } \sum_{i,j=1}^n c_i \bar{c}_j k(x_i, x_j) \geq 0 \quad (\bar{c}_j \text{ は複素共役})$$

が成り立つとき,  $k(x,y)$  を正定値カーネルという.

- 上の条件から Hermite性  $k(y, x) = \overline{k(x, y)}$  は自然に従う.  
(Exercise (やや難))

# 正定値カーネルの例

- Euclid内積

$$\Omega = \mathbf{R}^m \quad k(x, y) = x^T y$$

- 多項式カーネル

$$\Omega = \mathbf{R}^m \quad k_p(x, y) = (x^T y + c)^d \quad (d: \text{自然数}, c \geq 0)$$

- ガウスカーネル (RBFカーネル)

$$\Omega = \mathbf{R}^m \quad k_G(x, y) = \exp\left(-\frac{1}{\sigma^2} \|y - x\|^2\right) \quad (\sigma > 0)$$

- Laplacianカーネル

$$\Omega = \mathbf{R}^m \quad k_L(x, y) = \exp\left(-\beta \sum_{i=1}^m |x_i - y_i|\right) \quad (\beta > 0)$$

– 正定値であることはあとでチェックする

# 内積と正定値カーネル

## Proposition 2.1

$\Omega$ を集合,  $V$  を内積  $(, )$ を持つベクトル空間とし, 写像

$$\Phi : \Omega \rightarrow V$$

が与えられているとする.

このとき

$$k(x, y) = (\Phi(x), \Phi(y))$$

で定義されるカーネルは正定値である.

証明(実の場合)

$$\begin{aligned} \sum_{i,j=1}^n c_i c_j k(x_i, x_j) &= \sum_{i,j=1}^n c_i c_j (\Phi(x_i), \Phi(x_j)) \\ &= \left( \sum_{i=1}^n c_i \Phi(x_i), \sum_{j=1}^n c_j \Phi(x_j) \right) = \left\| \sum_{i=1}^n c_i \Phi(x_i) \right\|^2 \geq 0 \end{aligned}$$

– 特徴ベクトルの内積は, 正定値カーネルを与える.

# 概要

- 正定値カーネル  
定義と例
- 再生核ヒルベルト空間と正定値カーネル  
再生核ヒルベルト空間の定義  
正定値カーネルとの関係 (Moore-Aronszajn theorem)  
特徴写像
- 正定値カーネルとRKHSの基本的性質  
正定値カーネルの性質  
再生核ヒルベルト空間の性質  
Bochnerの定理



# ヒルベルト空間の復習

- (実)ヒルベルト空間

ベクトル空間で、内積  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  が与えられており、完備性(コーシー列が常に収束する)を満たす。

- ヒルベルト空間は、無限次元でもよい

- 例)  $L^2(a,b)$ : 区間  $(a,b)$  上の2乗可積分関数全体

$$\text{内積 } \langle f, g \rangle_{L^2(a,b)} = \int_a^b f(x)g(x)dx$$

- ユークリッド空間  $\mathbf{R}^m$  もヒルベルト空間のひとつ。

- 複素ヒルベルト空間も定義される。

# 再生核ヒルベルト空間

Def. 集合  $\Omega$  上の再生核ヒルベルト空間 (Reproducing kernel Hilbert space, RKHS)  $H$  とは,  $\Omega$  上の関数からなるヒルベルト空間であって, 任意の  $x \in \Omega$  に対し  $\phi_x \in H$  があって,

$$\langle f, \phi_x \rangle = f(x) \quad (\forall f \in H) \quad (\text{再生性})$$

を満たすものをいう.

– 再生核:  $k(y, x) := \phi_x(y)$

このとき  $\langle f, k(\cdot, x) \rangle = f(x)$

– 再生核は存在すれば一意的. (証明略 [Exercise])

– 再生核ヒルベルト空間は「関数空間」. しかし  $L^2$  とは大きく異なる.

注)  $k(\cdot, x)$ :  $x$  を固定した第1変数を変数とする1変数関数

# 再生核ヒルベルト空間と正定値カーネル

## Theorem 2.2

再生核ヒルベルト空間  $H$  の再生核  $k$  は正定値カーネルである.

証明 (実の場合)

対称性:

$$k(x, y) = \langle k(\cdot, y), k(\cdot, x) \rangle = \langle k(\cdot, x), k(\cdot, y) \rangle = k(y, x).$$

正定値性:

$$\Phi(x) := \phi_x = k(\cdot, x)$$

と定義すると, 再生性により

$$k(x, y) = \langle k(\cdot, x), k(\cdot, y) \rangle = \langle \Phi(x), \Phi(y) \rangle$$

Prop. 1 を使え.

# 再生核ヒルベルト空間と正定値カーネル

## Theorem 2.3 (Moore-Aronszajn)

$k(x,y)$  : 集合  $\Omega$  上の正定値カーネル



$\Omega$  上の関数からなるヒルベルト空間  $H_k$  で次の3つを満たすものが一意に存在する.

(1)  $k(\cdot, x) \in H_k$  ( $x \in \Omega$  は任意に固定)

(2) 有限和  $f = \sum_{i=1}^n c_i k(\cdot, x_i)$  の形の元は  $H_k$  の中で稠密

(3) (再生性)

$$f(x) = \langle f, k(\cdot, x) \rangle \quad \forall f \in H_k, x \in \Omega$$

証明略(福水 2010 参照)

# RKHS, 正定値カーネル, 特徴写像

- 正定値カーネルとRKHSは1対1に対応する

$$k \quad \longleftrightarrow \quad H_k$$

1対1

- 特徴写像

- カーネルトリック

$$\langle \Phi(x), \Phi(y) \rangle = k(x, y)$$

が成り立つためには, 正定値カーネル  $k$  を用意し,

$$\Phi : \Omega \rightarrow H_k, \quad \Phi(x) = k(\cdot, x)$$

を考えれば十分.

- 以降, 常に上の特徴写像を考える.

# 再生核ヒルベルト空間の例

- 線形カーネル

- RKHS for  $k(x,y) = x^T y$

$$H = \{f : \mathbf{R}^m \rightarrow \mathbf{R} \mid \exists a \in \mathbf{R}^m, f(u) = k(u, a) = a^T u\}$$

Inner product

$$\langle a^T u, b^T u \rangle = a^T b \qquad (\langle f_a, k(\cdot, b) \rangle = f_a(b))$$

- $H$  はEuclidean空間とヒルベルト空間として同型.

$$H \cong \mathbf{R}^m, \quad a^T u \leftrightarrow a$$

- 特徴写像は上の同型対応

線形カーネルは、ユークリッド空間の普通の内積に他ならない

- 有限集合  $\{1, 2, \dots, m\}$  上のRKHS

- 正定値カーネル  $K(i, j) =$  半正定値行列  $K$

- 固有値分解  $K = U\Lambda U^T$

$$U = (u_1, \dots, u_m), \quad \Lambda = \text{Diag}(\lambda_1, \dots, \lambda_m)$$

- 仮定:  $K$  は(狭義)正定値. *i.e.*,  $\lambda_i > 0$ .

- RKHS:

$$H = \{f : \{1, \dots, m\} \rightarrow \mathbf{R}\} = \{(f(1), \dots, f(m)) \in \mathbf{R}^m\}$$

内積

$$f = \sum_{i=1}^m a_i u_i, \quad g = \sum_{i=1}^m b_i u_i$$

$$\langle f, g \rangle = f^T K^{-1} g = \sum_{i=1}^m \frac{a_i b_i}{\lambda_i}$$

– 再生性のチェック

$$K = (k_1, \dots, k_m) \text{ (列ベクトル)} \quad k_i = K(\cdot, i)$$

任意の  $f \in H$  に対し,

$$\langle f, K(\cdot, i) \rangle = f^T K^{-1} k_i = f^T K^{-1} k_i = f^T e_i = f(i)$$

$$e_i = (0, \dots, 0, 1, 0, \dots, 0)^T$$

- Gaussian Kernel

- RKHS は無限次元.
- 後で詳述する.



# 概要

- 正定値カーネル  
定義と例
- 再生核ヒルベルト空間と正定値カーネル  
再生核ヒルベルト空間の定義  
正定値カーネルとの関係 (Moore-Aronszajn theorem)  
特徴写像
- 正定値カーネルとRKHSの基本的性質  
正定値カーネルの性質  
再生核ヒルベルト空間の性質  
Bochnerの定理

# 正定値性を保つ演算

Proposition 2.4  $k_i(x, y) : \Omega$  上の正定値カーネル ( $i = 1, 2, \dots$ ).  
以下も正定値カーネル.

(1) Positive combination  $a_1 k_1(x, y) + a_2 k_2(x, y)$  ( $a_1, a_2 \geq 0$ )

(2) Product  $k_1(x, y) k_2(x, y)$

(3) Limit  $k(x, y) = \lim_{n \rightarrow \infty} k_n(x, y)$

正定値カーネルのなす凸錐

ある集合  $\Omega$  上の正定値カーネル全体は、積について閉じた  
(各点位相での)閉凸錐

証明)

- 1)は自明. 3)は正定値性の条件が極限操作で保たれることからわかる.  
2)を示すには, 2つの半正定値行列  $A, B$  の成分ごとの積 (Hadamard積) がまた半正定値であることを示せばOK.

Lemma 2.5.

2つの半正定値行列  $A, B$  のHadamard積は半正定値である.

証明)

$$A = \sum_a \lambda_a u_a u_a^T \quad : \quad \text{固有値分解} (\lambda_a \text{ 固有値}, u_a \text{ 固有ベクトル})$$

$$\begin{aligned} \sum_{i,j=1}^n c_i c_j A_{ij} B_{ij} &= \sum_{a=1}^n \sum_{i,j=1}^n c_i c_j \lambda_a u_a^i u_a^j B_{ij} \\ &= \sum_{a=1}^n \lambda_a \left( \sum_{i,j=1}^n \boxed{c_i u_a^i c_j u_a^j} B_{ij} \right) \geq 0 \end{aligned}$$

(半正定値性より  $\lambda_a \geq 0$ )

# 正定値カーネルの例:再論(証明)

- 多項式カーネル

$x^T y$  は正定値

$\Rightarrow x^T y + c$  は正定値 ( $c \geq 0$ )

$\Rightarrow (x^T y + c)^d$  は正定値 ( $d$  個の積)

- ガウスカーネル

$x^T y$  は正定値

$\Rightarrow e^{\frac{1}{\sigma^2} x^T y} = 1 + \frac{1}{\sigma^2} x^T y + \frac{1}{2!} \left( \frac{1}{\sigma^2} x^T y \right)^2 + \frac{1}{3!} \left( \frac{1}{\sigma^2} x^T y \right)^3 + \dots$  は正定値

$\Rightarrow e^{-\frac{1}{2\sigma^2} x^T x} e^{\frac{1}{\sigma^2} x^T y} e^{-\frac{1}{2\sigma^2} y^T y} = \exp\left(-\frac{1}{\sigma^2} \|x - y\|^2\right)$  は正定値

(Prop. 2.6)

# 正定値性を保つ変換

## Proposition 2.6.

$k(x, y) : \Omega$  上の正定値カーネル,  $f : \Omega \rightarrow \mathbf{R} : \text{任意の関数}$ とすると,

$$\tilde{k}(x, y) = f(x)k(x, y)f(y)$$

は正定値.

特に, 正定値カーネルが  $k(x, x) > 0$  ( $x \in \Omega$  は任意) を満たすとき,

$$\tilde{k}(x, y) = \frac{k(x, y)}{\sqrt{k(x, x)k(y, y)}} = \frac{\langle \Phi(x), \Phi(y) \rangle}{\|\Phi(x)\|_{H_k} \|\Phi(y)\|_{H_k}}$$

は正定値(normalization).

証明) 略 [Exercise]

例)

$$k(x, y) = (x^T y + c)^d \quad (c > 0) \quad \Longrightarrow \quad \tilde{k}(x, y) = \frac{(x^T y + c)^d}{(x^T x + c)^{d/2} (y^T y + c)^{d/2}}$$

# 和・積に対するRKHS

$(H_1, k_1), (H_2, k_2)$  : RKHS とその正定値カーネル

- **和空間**  $H_1 + H_2$

- 正定値カーネルの和  $k = k_1 + k_2$  に対応するRKHSは, ベクトル空間として

$$H_1 + H_2 = \{f : \Omega \rightarrow \mathbf{R} \mid \exists f_1 \in H_1, \exists f_2 \in H_2 \text{ such that } f = f_1 + f_2\}$$

- 内積  $\|f\|^2 = \min_{f=f_1+f_2, f_1 \in H_1, f_2 \in H_2} \|f_1\|_{H_1}^2 + \|f_2\|_{H_2}^2$

- **積空間**  $H_1 \otimes H_2$

- 正定値カーネルの積  $k = k_1 k_2$  に対応するRKHSは, ベクトル空間としてテンソル積.

$$f = \sum_{i=1}^n f_i g_i \quad (f_i \in H_1, g_i \in H_2) \text{ の形の関数が稠密.}$$

- 内積

$$\left\langle \sum_{i=1}^n f_i^{(1)} g_i^{(1)}, \sum_{j=1}^m f_j^{(2)} g_j^{(2)} \right\rangle = \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^m \left\langle f_i^{(1)}, f_j^{(2)} \right\rangle_{H_1} \left\langle g_i^{(1)}, g_j^{(2)} \right\rangle_{H_2}$$

# 連続なカーネルに対するRKHS

## – 連続性／微分可能性

位相空間 $\Omega$ 上の正定値カーネル  $k(x, y)$  が連続のとき、  
定義されるRKHS  $H_k$  の関数はすべて連続関数.

$$\begin{aligned} \because) \quad |f(x) - f(y)|^2 &= \left| \langle f, k(\cdot, x) - k(\cdot, y) \rangle \right|^2 \leq \|f\|^2 \|k(\cdot, x) - k(\cdot, y)\|^2 \\ &= \|f\|^2 (k(x, x) - 2k(x, y) + k(y, y)) \rightarrow 0 \quad (x \rightarrow y) \end{aligned}$$

実は、 $\mathbf{R}^m$  上の正定値カーネル  $k(x, y)$  が微分可能のとき、  
 $H_k$  のすべての関数が微分可能.

# 平行移動不変なカーネル

Def.  $\mathbf{R}^m$  上の正定値カーネル  $k(x,y)$  が**平行移動不変(shift-invariant)**であるとは, ある1変数関数  $\phi(z)$  があって,  $k(x,y) = \phi(x-y)$  と書けることをいう.

Ex) Gauss カーネル, ラプラスカーネル

– Fourier kernel (complex-valued):

$$\exp(\sqrt{-1}\omega^T(x-y)) = \exp(\sqrt{-1}\omega^T x)\exp(-\sqrt{-1}\omega^T y) \quad \Rightarrow \quad \text{正定値}$$

–  $k(x,y) = \phi(x-y)$  が正定値カーネルとなるとき,  $\phi(z)$  を**正定値関数**という.



- ガウスカーネルの正定値性(別証明)

- ガウス関数の逆Fourier変換表示

$$\exp(-\|x\|^2/2) = \frac{1}{(2\pi)^m} \int_{\mathbb{R}^m} \exp(-\|\omega\|^2/2) \exp(\sqrt{-1}\omega^T x) d\omega$$

ガウス関数の Fourier変換は, またガウス関数

- 正定値性の証明

$$\underbrace{\sum_t \exp(-\|\omega_t\|^2/2)}_{\text{正の数}} \underbrace{\exp(\sqrt{-1}\omega_t^T (x-y))}_{\text{正定値カーネル}} \rightarrow \exp(-\|x-y\|^2/2)$$

↓  
正定値

# Bochnerの定理

## Theorem 2.7 (Bochner)

$\mathbf{R}^m$  上の連続関数  $\phi(z)$  が正定値であるための必要十分条件は、 $\mathbf{R}^m$  上のある非負有限Borel測度  $\Lambda$  が存在して

$$\phi(z) = \int \exp(\sqrt{-1}\omega^T z) d\Lambda(\omega)$$

が成り立つことである。

積分は Lebesgue-Stieltjes 積分。

– 十分性:  $\Lambda$  が連続な密度関数  $\rho(\omega)$  を持つ場合は

$$\sum_t \exp(\sqrt{-1}\omega_t^T z) \rho(\omega_t) \rightarrow \phi(z)$$

必要性は少し難しい\*。

\* さまざまな証明が知られている。参考文献は福水2010参照。

# RKHSのFourier変換による表示

仮定: Bochnerの表示で,  $\Lambda$ が連続な密度関数  $\rho(\omega)$  を持つとせよ.

$$k(x, y) = \int \exp(\sqrt{-1}\omega^T(x - y))\rho(\omega)d\omega$$

RKHS  $H_k$  は以下で与えられる.

$$H_k = \left\{ f \in L^2(\mathbf{R}^m, dx) \mid \int \frac{|\hat{f}(\omega)|^2}{\rho(\omega)} d\omega < \infty \right\}$$

$$\langle f, g \rangle = \int \frac{\hat{f}(\omega)\overline{\hat{g}(\omega)}}{\rho(\omega)} d\omega$$

ただし,  $\hat{f}(\omega)$  は  $f$  のFourier変換

$$\hat{f}(\omega) = \frac{1}{(2\pi)^m} \int \exp(-\sqrt{-1}\omega^T z) f(z) dz$$

証明の概要:

- $\langle f, g \rangle$  は  $H_k$  の内積を定める (自明)
- $k(\cdot, x)$  は  $H_k$  の再生核となる.

$$\begin{aligned} k(x, y) &= \int \exp(\sqrt{-1}\omega^T(x-y))\rho(\omega)d\omega \\ &= \int \exp(\sqrt{-1}\omega^T x) \exp(-\sqrt{-1}\omega^T y)\rho(\omega)d\omega \end{aligned}$$

⇒  $k(\cdot, y)$  ( $y$  fixed) のFourier変換は

$$\exp(-\sqrt{-1}\omega^T y)\rho(\omega)$$

⇒  $\langle f, k(\cdot, y) \rangle = \int \frac{\hat{f}(\omega) \overline{\exp(-\sqrt{-1}y^T \omega)\rho(\omega)}}{\rho(\omega)} d\omega$

$$= \int \hat{f}(\omega) \exp(\sqrt{-1}y^T \omega) d\omega = f(y)$$

# RKHSのFourier変換による表示

- Gauss Kernel

$$k_G(x, y) = \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2}(x - y)^2\right) \quad \rho(\omega) = \frac{1}{2\pi} \exp\left(-\frac{\sigma^2}{2}\omega^2\right)$$

$$H_k = \left\{ f \in L^2(\mathbf{R}^m, dx) \mid \int |\hat{f}(\omega)|^2 \exp\left(\frac{\sigma^2}{2}\omega^2\right) d\omega < \infty \right\}$$

$$\langle f, g \rangle = 2\pi \int \hat{f}(\omega) \overline{\hat{g}(\omega)} \exp\left(\frac{\sigma^2}{2}\omega^2\right) d\omega$$

- Laplacian Kernel

$$k_L(x, y) = \exp(-\beta |x - y|) \quad \rho(\omega) = \frac{1}{2\pi(\omega^2 + \beta^2)}$$

$$H_k = \left\{ f \in L^2(\mathbf{R}^m, dx) \mid \int |\hat{f}(\omega)|^2 (\omega^2 + \beta^2) d\omega < \infty \right\}$$

$$\langle f, g \rangle = 2\pi \int \hat{f}(\omega) \overline{\hat{g}(\omega)} (\omega^2 + \beta^2) d\omega$$

# セクション2のまとめ

- 正定値カーネル

- 特徴写像の内積を与えるカーネル  $\langle \Phi(x), \Phi(y) \rangle = k(x, y)$
- 例: 多項式カーネル, ガウスカーネル, ラプラスカーネル

- 再生核ヒルベルト空間

- 再生核を持つ関数空間
- 正定値カーネルと再生核ヒルベルト空間は1対1に対応

- 特徴空間・特徴写像

$$\Phi : \Omega \rightarrow H_k, \quad \Phi(x) = k(\cdot, x)$$

を考えれば十分

- 基本的性質

- 正定値カーネルを保つ演算: 和, 積, 極限, 正規化
- Bochnerの定理: 平行移動不変な正定値カーネルのFourier表示

## 参考文献

Aronszajn, N. (1950). Theory of Reproducing Kernels. Transactions of the American Mathematical Society 68 (3): 337–404.

Berlinet, A. and C. Thomas-Agnan, *Reproducing kernel Hilbert spaces in Probability and Statistics*, Kluwer Academic Publishers, 2004.

福水 「カーネル法入門 — 正定値カーネルによるデータ解析」  
朝倉書店(2010)